

教材の作成と講義の試行に関する研究

研究分担者 岡野 聡 愛媛大学大学院理工学研究科助教

研究要旨

ミャンマーの大学で日本式の安全講習会を開催した。また、オリジナルの英語教材の分担執筆を行うとともに作成に関する取りまとめを行った。

A. 研究目的

最大都市ヤンゴンの近郊Thilawaに我が国とミャンマー政府とが協力して大規模な工業用地を開発し日本企業を誘致しているが、ミャンマーでは安全衛生といった、人の生活の基本についての知識導入や啓蒙活動は不十分である。また政府は、その重要性については理解しているものの法体系の整備も遅れ、現状ではそこまで手が回っていないという状況である。本研究は、ミャンマーの工科系大学で日本式の労働安全衛生に関する講義を継続的に開講し、日本的な安全衛生習慣を持った技術者を育成することを目的としている。その中で研究分担者は、高压ガスの安全性や取り扱い、リスクアセスメント、指差し確認、KYTなど日本の企業において日常的に実施されている安全対策について試行講義の分担試行を行った。また安全衛生のテキストの分担執筆を行った。

B. 研究方法

ミャンマーにおいては安全衛生に関する法整備はもちろん、研究室・工事現場・工場等における危険性についてはほとんど認知されていない。そのためいくつかのミャンマーの大学において、講義及び実習を行った。講義の内容としてはリスクとハザードの違いについて説明を行い、リスクアセスメント、5S、指差し確認の実習を40分程度行った。また、高压ガスの危険性及び取り扱いに関する講義も30分程度行った。国内でのテキストの打ち合わせはZOOMによるweb会議システムを用い、研究分担者はテキスト作成のとりまとめを行った。またミャンマー側のモービー工科大学の教員との連絡は共同研究者のRuth氏が行い、日本とミャンマーの現状や習慣の違いについても留意した。

（倫理面への配慮）

本研究は、ミャンマーの各大学において安全管理についての講義の実施及びテキスト作成を行ったものであり、実験等は一切行っていない。そのため倫理面への問題はないものと判断した。

C. 研究結果

講義に関しては、いずれの大学においても50-60名ほどの教員及び学生が受講した。教員は非常に興味津々に説明を聞いているという印象であった。一方学生については講義形式ではあまり反応は見られなかったものの、意見を求めたり、グループワークを実施する際には非常に活発にかつ興味津々に取り組んでいたのが印象的であった。ミャンマーにおいては安全面に関する意識及び法令に関してはまだまだ未整備であることから、今回のような講義は非常に有効であったものと考えられる。またテキスト作成においては、遠隔での打ち合わせにより対面と同等の完成度のテキストが完成した。

E. 結論

ミャンマーの複数の大学において魅力的な安全衛生講習会を開催することができた。また、テキストの作成に大きく関わることで、安全衛生に関する知識と経験を積むことのできる効果的なテキストが完成した。

E. 研究発表

該当なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

- 1.特許取得
該当なし
- 2.実用新案登録
該当なし
- 3.その他
該当なし